

女子大学生のファッションからみるジェンダー問題

ー私服からリクルートスーツまでー

哇上葉月

第1章では、ファッションが日常を彩る重要な役割を果たし、服装が気分を上げることに触れた。しかし、アルバイト先のハワイアンカフェでヒールを履くことに苦しんだ経験を通して、服装に対する社会的期待が女性に強く影響していることを感じた。現代でも女性に求められる「理想像」は根強く、服装に圧力を感じる人が多い。

第2章では、ファッションとジェンダーに関する問題を考察した。特に、性別にとらわれない教育が重要であると感じている。友人の性別に対する悩みを理解し、性別に関わらず人としての価値を大切にすることの重要性を再認識した。非バイナリーや性同一性障害の人々が増える中、性別を超えた視点が必要だと強調した。

第3章では、ファッション雑誌が長年女性に「こうあるべき」という理想像を押し付けてきた点について述べた。『JJ』などの女性誌は、女性が「男性に選ばれるため」の服装を提案し、これが多くの女性に無意識に影響を与えてきた。現代でも、これらの理想像はファッションに強く残っており、社会における女性像が依然として影響をもち続けている。

第4章では、就職活動における服装について触れた。リクルートスーツが一般的に求められる、特に女性にはスカートが推奨される点に違和感を覚えるが、最近ではパンツスーツの選択肢も増えてきた。服装が面接の第一印象に大きな影響を与えるため、清潔感を保ちつつ自分らしさを大切にすることが重要だと感じている。

第5章では、私服での就職活動に関するプレッシャーについて述べた。アパレル業界やクリエイティブ職では私服面接が一般的だが、自由すぎる選択肢に対して服装選びのプレッシャーが強くなることがある。派手すぎずカジュアルすぎない服装で自分らしさを表現することが求められ、服装が印象に大きな影響を与えるため、清潔感を大切にしつつ、自分を表現できる服を選ぶことが重要だと考えている。今後、「就職活動」と「私服」がどのように発展を続けていくのか、どのような意図でその服装を選択したのかについて着目していきたい。